

4) クローバー＝詰草(ツメクサ)

クローバーはマメ科シャジクソウ属の多年草または一年草で、葉は互生し倒心臓形の三小葉からなる複葉を持ち、長い葉柄がある。花は小さい蝶形花が集まって球状になったもので、春先 4 月頃から秋まで断続的に開花する。原産地はヨーロッパ、西アジア、北アジアで、シロクローバーとアカクローバーがよく知られている。この他にもクリムソンクローバーやストロベリークローバーと呼ばれるものがある。和名のツメクサの由来は、クローバーの葉をヨーロッパでは、荷造りの詰めものとして利用されていたために名付けられたものである。学名は『*Trifolium*』で、三を意味する「tri」、葉を意味する「folium」の合成語である。イギリス名は『clover』で、フランスでは『trèfle』と呼ばれている。

クローバーの語源は、ローマ神話に登場する英雄ヘラクレスが持っていた、三つのコブのある棍棒に由来する。長い葉柄と三小葉からなる葉の形が、ヘラクレスの棍棒に似ていると考えたのだろう。このため最初ラテン語で棍棒を意味するクラバ『clava』と呼ばれていたが、これがやがて『club』に転訛し、さらに『clover』になったものである。トランプの『クラブ』が、このクローバーの葉形をモチーフにしているのはこのためである。

クローバーはアイルランドの国花となっており、これは 5 世紀の中頃キリスト教の布教者として、最初にこの地を訪れた聖パトリックが、『三位一体』の教えを、均整のとれたクローバーの三枚の葉に結びつけたのが始まりである。聖パトリックはさまざまな奇跡を行ない、やがて人々の尊敬を一身に集めた。アイルランドでは現在でも聖パトリックの日には、胸にクローバーの葉をさす習慣が残っている。またヨーロッパではクローバーの三枚の葉は希望、信仰、愛情を表わすものとされ、四枚目の葉は幸福のしるしとされている。このため四つ葉のクローバーを見つけたら、人に知られないように靴底にかくしたり、服に縫い込んだり、幸せが逃げないように密かにしまっておく習慣がある。さらに五つ葉は金運を、六つ葉は地位や名誉を、七つ葉は最高の幸せをもたらすものと考えられてきた。四つ葉のクローバーを一つ見つけたら、付近を丹念に探すと他にも見つかることが多いのでよく探してみることをお勧めしたい。運がよければ五つ葉や六つ葉にも出逢えるかもしれない。

クローバーが日本に渡来したのは 1846 年(弘化 3 年)江戸末期のことで、オランダから幕府に贈られたガラス製の花瓶や、照明器具などの梱包材として持ち込まれ、種子が播種されて広がったのが最初である。その後明治になって日本でも牧畜が盛んになると、北海道などで牧草として本格的に導入されるようになった。特に茎葉は栄養価が高く牧草として最適で、また根に着く根粒菌は空気中の窒素を固定して、土地を豊かにする働きをする(08-01-11)。このために休耕田の作物としても最適で、日本でも急速にひろまったし、アメリカのバーモント州では州花として人々に愛されている。

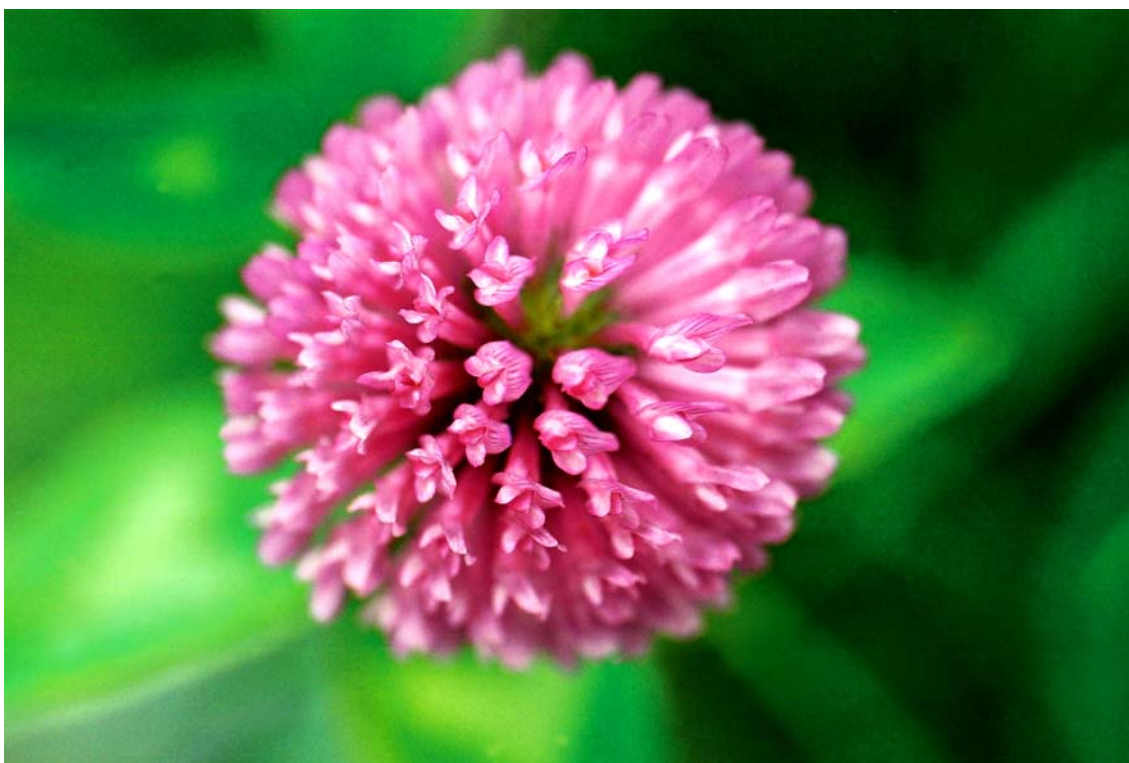
クローバーを食べない家畜はほとんど存在しない。小はウサギに始って、大はヤギや羊、牛や馬にいたるまで、この草を喜んで食べる。特に日本のようなモンスーン地帯では夏季の熱射と降雨のために、大半の草が堅く、しかも伸びすぎて飼料として不適切になってしまう。しかしクローバーは夏季でも比較的柔らかく、しかも家畜に食われてから後も、よく伸びる。そういう点からもこの草は酪農家にとっては貴重品であるといえよう。しかしその一方では草丈が小さいために、量をまかなうには余程の面積がないと物足りないという難点も抱えている。

ヨーロッパでは夏季、比較的雨量も少なく、気候も日本と比べると冷涼なため、草は家畜が食べた後も、ゆっくりと伸びて日本のように堅く大きくならない。日本とヨーロッパでは家畜を飼育するための根本的な風土が全く異なっているのである。そういう点で、牛肉のコストも、また乳製品のコストも、欧米諸国には到底及ばない。さらに悪いことに日本の乳製品メーカーは牛乳を安く加工して、大量に販売する努力を怠っているように見える。筆者にはなぜ牛乳は 1ℓ もしくは 0.5 ℓ の紙パックでしか販売されていないのか理解に苦しむ。この紙パックの原材料はかなり高価なもので、コストを高くしている上に、一旦開封すると再度キャップをすることが出来ない。つまり、ちょっとバッグに入れたり、リュックに入れてハイキングに持参することは不可能なのである。勿論ドライブにも不適切なパッケージである。これが普通の飲料と同様に、ペットボトルで販売されれば、もっと需要も伸びるし、取り扱いも簡便になるはずである。確かに牛乳は凍らせたりすると、他の飲料と異なり、脂肪分が分離するなどの課題は残る。しかしそれでもなお、ペットボトルでの販売を検討すべきではないだろうか。筆者は、日本での飲料水の販売を飛躍的に伸ばしたのは、ペットボトルの開発と、自動販売機の大量設置であると考えている。牛乳は他の飲料水と比べると賞味期限は短く、腐敗しやすいという課題を抱えている。しかし缶入りにすると工夫をすれば、不可能ではないように思う。店頭でもペットボトル化を模索した方が、パッケージコストも下がり、販売量も伸びてくるのではないだろうか。

筆者が子供の頃、牛乳といえば、180ml の牛乳ビンだった。ビンにつめられた牛乳が毎朝、牛乳配達のおじさんに運ばれて、玄関か門に取り付けられた牛乳ポストに入れられていた。やがて人件費の高騰や、配達員の不足によって、この方式は時代にあわしくなくなった。これが牛乳紙パックになったことは、革命的な進歩であったと思う。しかし現在牛乳や乳製品が抱えている現実を直視すると、もう一度革命的な販売方法と、乳牛飼育について国家的なプロジェクトを立ち上げ、検討すべき段階に入っているように思う。牛乳がカルシウムを多く含み、『骨粗鬆症』や骨格の強化に有効であることを考慮するとき、牛乳の消費拡大は、日本人にとって大事な課題でもある。現在『米』の生産量が最も多いのは北海道だが、農水省と政治家は、どこかでボタンの賭け違いをしているのではないかと、筆者は考えているのである。



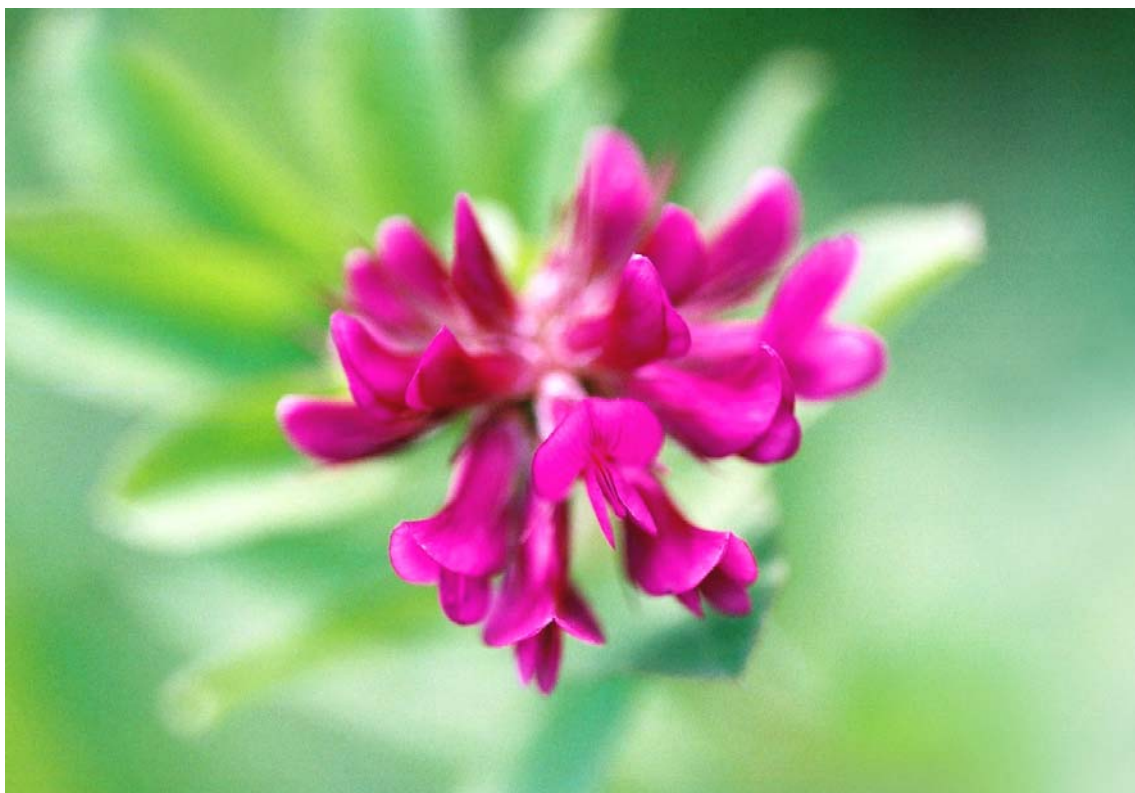
シロクローバーは何処にでも普通に見られる雑草でありふれた花だが、アップしてみるとなかなかかわいらしい形をしている(さいたま市緑区)。



アカクローバー、こうやって見ると一瞬、何の花か迷ってしまう(長野県佐久市)。



横から見たアカクロバー、なんとも優しげな花ではある(長野県美軽井沢町)。



近縁種のシャジクソウ(車軸草)は、高原などのやや湿り気が多い、また日当たりのよいところでよく見かける花である。アカクローバーよりもさらに色が濃い(長野県美ヶ原高原)。



近縁種のシャジクソウ、一輪ずつ見るとクローバーとよく似た花である(長野県美ヶ原高原)。



ツバメシジミはマメ科植物を食草としている蝶の代表。ツメクサやシャジクソウの他ヤマハギやクサフジ、エンドウなどを食べて育つ。この個体は裏面の紅紋が鮮やかだった(山梨県北杜市)。



モンキチョウもマメ科植物を食べて育つ。写真はモンキチョウの交尾(長野県上田市)。 [目次に戻る](#)